



アフリカ農村における移入者のライフヒストリーからみる移住過程：ザンビア北西部の多民族農村における保証人に着目して

原, 将也

(Citation)

E-journal GEO, 12(1):40-58

(Issue Date)

2017

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

© 2017 公益社団法人 日本地理学会

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90007603>



調査報告

アフリカ農村における移入者のライフヒストリーからみる移住過程 —ザンビア北西部の多民族農村における保証人に着目して—

Migration Process for Immigrants in Rural Africa: Focusing on Guarantors
in a Multi-ethnic Community in Northwestern Zambia

原 将也

HARA Masaya

(2017年1月11日受付 2017年3月25日受理)

本稿では現代のアフリカ農村において、移住を仲介する保証人という存在に着目し、人びとが移住して生活基盤を確立していく過程を明らかにする。ザンビア北西部ムフンブウェ県にはカオンデという民族が居住するが、ルンダ、ルバレ、チヨークウェ、ルチャジという異なる民族の移入者を受け入れたことで、複数の民族が混住する。移入者の移住形態は農村を転々とした「農村→農村型」、都市で働いたのちに農村へ移住した「都市経由型」、都市生まれで農村へ移った「都市→農村型」の三つに分けられた。カオンデ以外の移入者は、親族間のもめごとや親族からの都市生活に対する妬みを避けるため、カオンデ農村へ移住した。彼らは親族ではなく、ルンダ語でチンサフという保証人を頼っている。移入者が信頼を寄せる人物であれば、だれもが保証人になりうる。アフリカ農村では人間関係を礎とした保証人によって、人びとの移住と平穏な暮らしが実現されている。

This paper examines the role of guarantors who help immigrants with the immigration process and with establishing new lives in rural Africa. The Kaonde live in the Mufumbwe District, Northwestern Province, Zambia. There are four other ethnic groups in this area: the Lunda; the Luvale; the Chokwe; and the Luchazi. These four groups are immigrants, and are permitted by the Kaonde chief to live in the Kaonde area. There are three basic types of migration: "village to village," where people move from one village to another; "via city," where people from villages move to the city for work and later move to a village; and "city to village," where people born in the city move to a village. Most non-Kaonde immigrants moved to a village to escape family conflict or to avoid creating envy of their urban lifestyle among their relatives. They rely on guarantors, who are known in the Lunda language as *chinsahu*. Any person can become a guarantor if he or she is trusted by an immigrant. Guarantors can help to ensure a peaceful migration, provide friendship, and assist immigrants in building new lives in rural Africa.

キーワード：カオンデ、ルンダ、社会関係、都市–農村関係、ザンビア

Key words: Kaonde, Lunda, social ties, urban–rural relationship, Zambia

I はじめに

グローバル化が進んだ現代では、技術革新とともに容易に携帯電話やパソコンで情報を得られ、安価に航空券を購入できるようになったことで、人びとは日常的に移動し、みずから社会的な安全や経済的な利益を確保している（栗田2016）。その一方で近年、ヨーロッパ諸国では急激に流入する移民に不安を抱き、移民に対して厳しい制限をかけようとする論調が高まっている。移動する人びとの安全は各国の制度だけでは十分に保障されておらず（柄谷2016）、人びとはみずからの社会関係を利用して移動することで、

脆弱な経済状況や社会的な不安から逃れ、不確実な現代社会を生きているといえる（Ferguson 1999; Muanamoha et al. 2010; Walker 2010; Joseph and Khan 2015など）。移住者は人口密度が低く、土地や食料といった資源が豊富に存在する地域では受け入れられてきたが、近年では世界各地で移住者の排除や先住者との対立が生じている。

長いあいだ移動をともなう焼畑農耕や牧畜、狩猟採集が主な生業となっていたサハラ以南アフリカ（以下、アフリカ）においても、移動は自然環境や社会編成の変化に対応し、生存を確保するための重要な手段の一つとされてきた（Potts 1995; van der Geest 2010な

ど). しかし近年では、限りある資源をめぐって、先住者と移住者のあいだで排除や衝突が起こっている（加藤2011; 村尾2014など）。このような中で、人びとは社会関係を頼って平穏に暮らすことのできる移住先を求めている。

人びとの移動が日常的であったアフリカでは、イギリスやフランスをはじめとするヨーロッパ列強による植民地統治の過程で、農民の都市への労働移動が活発となった。植民地時代には、植民地政府は現地民に対して税金を賦課し、農民たちは仕事を斡旋された鉱山やプランテーション、都市へ移動して働いた（松田1996; 網中2014）。植民地時代から移動が容易になった今日にいたるまで、アフリカの人びとは現金収入を得て経済的に豊かに暮らすことを望み、利便性の高い都市へ移動する。近年では、農民が経済的な理由のほかに個人や親族間での争い、社会的や政治的な問題をきっかけとして都市へ移住している（Smit 1998）。

アフリカでは都市への移住者は出身村とのつながりを堅持することで、都市で暮らすことができている（Smit 1998; Englund 2002; Gugler 2002; Owour 2007など）。都市居住者は村に住む親族からの食料支援、村に帰るときに必要となる耕作地や住居の確保など、みずからが困窮しないよう村の親族から支援を受けている（Smit 1998; Owour 2007）。その一方で家計に余裕ができると、都市の人びとは村に残る親族への送金や村から訪問してきた親族の受け入れ、出身村全体への経済的な支援などをおこなう（Trager 1998; Gugler 2002）。都市居住者は生活に窮乏すると農村に戻ることを想定し、そのために出身村とのつながりを保持しつづけている（小倉1995; Cliggett 2003）。アフリカでは農村と都市の住人のあいだには強堅な親族関係がみられ、それは一方向ではなく双方向的なつながりである（Frayne 2004）。

このような農村と都市双方の暮らしを支える親族関係は、移住後の生活だけでなく、移動中にも重要な役割を果たす。移住者は移動先への道案内、移動中の食料や休息場所の確保、移住先への受け入れなどを親族の支援に頼ることで円滑に移り住むことができる（Muanamoha et al. 2010; Joseph and Khan 2015）。移住前からもつ親族関係を頼ることで、移住者は新しい居住地でもみずからライフスタイルを変えることなく

暮らしている（Gold 2005）。これまでアフリカでは、キョウダイやイトコ、オジなどの移住者と近しい関係にある親族が移住者の受け入れ先になることが指摘されてきた（松田1996; Frayne 2004; 杉山2007など）。本稿で取り上げるザンビアは、1973年のオイルショックから長期にわたって不況に陥った。そのため都市で暮らすことが難しくなった人びとは、両親や親族の村に帰村して生活を立て直していた（小倉1995; Ferguson 1999）。

しかし必ずしも親族を頼ることができるわけではなく、たとえ帰村したとしても平穏に暮らせるわけではない。ザンビアの鉱山退職者の中には、帰村後に周囲の親族から現金所得を得ていたことを妬まれ、社会的に孤立しながら農村で暮らす人や、教会や友人のつながりで農村に移住した人もいる（Ferguson 1999）。みずからをとりまく困難な状況を打破するためには親族関係だけでなく、もううる社会関係を駆使して居住場所を移す必要がある。都市近郊には、植民地時代に国外から来た出稼ぎ労働者が退職後にそのまま居残ったため、複数の民族が共住する村も存在する（島田2007）。

現代のアフリカ農村では、バイオ燃料や食料を生産する大企業によって、農民たちの土地が奪取されるおそれが高まっている（Vermeulen and Cotula 2010）。人口増加だけでなく、大企業によるランドグラッピングや開発に起因する土地荒廃によって、可耕作地が減少し、農民たちは移住せざるを得ない（Joseph and Khan 2015）。農村における土地の狭小化や荒廃によって、都市居住者も農村へ移住しづらくなっている（小倉2009: 143–145）。

経済が発展し、農村における土地の狭小化が進む中、もはや人びとはみずからの出身村には移住できず、親族以外の地縁や友人関係を頼って移住先を探している。本稿では、新たな土地に移住した人びとの移住過程とそのときに頼った社会関係を検討する。本稿の調査地であるザンビア北西部のシュークウェ Shukwe 地区には、先住のカオンデ Kaonde¹⁾ が異なる民族の移入者を受け入れたことで複数の民族が混住している。本稿では、もともとカオンデの農村であったシュークウェ地区におけるカオンデ以外²⁾ の民族の移入者に着目する。シュークウェ地区への移住を仲介す

るチンサフ *chinsahu* (L³⁾) という保証人に焦点をあてて、移入者のライフヒストリーを検証することで、現代のアフリカ農村で人びとが移住して生活基盤を確立していく過程を明らかにする。先行研究では、移住について社会関係の視点から多くの議論がなされてきた。本稿ではライフヒストリーに着目して、ひとりひとりの移住を追うことで、地理的な移住経路と社会的な移住経緯の双方から総合的に考察できると考えている。なお本稿は、2011年9月～2016年10月に断続的におこなった約22カ月間の現地調査にもとづいている。

II ザンビアにおける人びとの移動史

1. ザンビア北西部の民族の移動史

アフリカ中南部にひろがる乾燥疎開林のミオンボ miombo 林帯⁴⁾ では、希薄な人口分布を背景として、バントゥー Bantu 系の農耕民が焼畑農耕と移動を繰り返しながら生活してきた（掛谷 1993）。本稿で取り上げるザンビア北西部はミオンボ林帯に含まれ、人びとは今日でも自給指向性の強い生活を営む。調査地であるザンビア北西部州ムフンブウェ Mufumbwe 県シュークウェ地区（図1）には、カオンデとルンダ Lunda, ルバレ Luvale, チューケウェ Chokwe, ルチャジ Luchazi という五つの民族が混住する。これらの民族はそれぞれの言語をもち、カオンデ語とルンダ語とル

バレ語・チョーケウェ語・ルチャジ語の3グループに分けられ、お互いに類縁性が高い（Kashoki 1978）。この中で最も離れているとされるカオンデ語とルバレ語でも、30%の語彙が共通している（Kashoki and Mann 1978）。

本節ではまず、ザンビア北西部におけるそれぞれの民族の移動史をみていく。カオンデはルバ Luba 王国を祖とし、16～18世紀にクラン clan⁵⁾ごとに現在のコンゴ民主共和国南部からザンビアへ移動してきた。最初にザンビア北西部へ到達したクランは、水クラン *Balonga* (K), シロアリ塚クラン *Benakyulu* (K), ライオングラン *Batembuzhi* (K) であった（Jaeger 1981）。シュークウェ地区にも、コンゴ民主共和国を出身地とする祖先が創設した村が存在し、男性にとって古い村の村長を継承することは誇らしいとされている。

ルンダは1600年ごろ、現在のコンゴ民主共和国の南部に王国を築き、その勢力は強大であった⁶⁾（Vansina 1966: 70）。18世紀にルンダ王国は、現在のアンゴラ北部の現地人商人とつながることでポルトガル人商人との交易に携わり、布とタバコと銃を内陸部へもたらした（Bustin 1975: 21）。現在ザンビアに居住するルンダは、1700年ごろにシンデ Shinde, カノンゲシャ Kanongesha, ムソカンタンダ Musokantanda という名前のチーフ3人がそれぞれ現在のアンゴラ南部、アンゴラ東部、ザンビア北西部へ移動してきたと

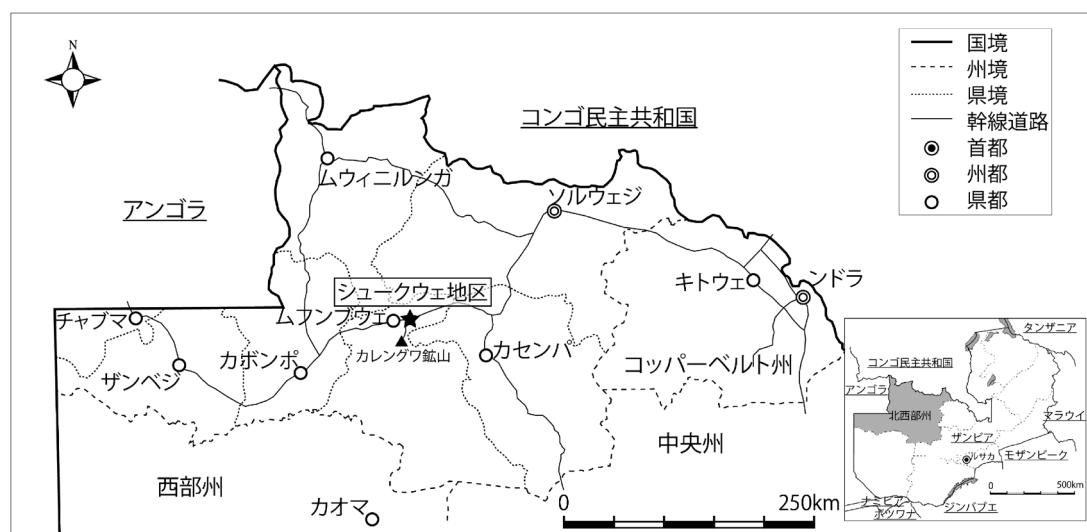


図1 調査地シュークウェ地区の位置

(筆者作成)

いう伝承をもつ (White 1949; McCulloch 1951: 9; Vansina 1966: 162)。ルバレとチョークウェ、ルチャジもルンダ王国を祖とする伝承をもち、それぞれの社会構造はルンダと類似しているという (McCulloch 1951)。またルンダとルバレ、チョークウェ、ルチャジは、いずれもムカンダ *mukanda* (L) という男子割礼を催し、言語の類縁性が高いという点で社会・文化的に近接している (Kashoki 1978; von Oppen n.d.)。

2. 20世紀以降における農村と都市のあいだの移動
20世紀前半には、北ローデシア（現在のザンビア）の鉄道沿線や鉱山地帯で都市が築かれ、人びとは農村から都市へ移動するようになった。本節ではザンビア国内を対象にして、20世紀以降の社会経済の変動とそれにあわせた人びとの移動について取り上げる。

20世紀初頭まで北ローデシアは、南ローデシア（現在のジンバブウェ）のプランテーションや南アフリカの鉱山への労働力の供給源としてみなされてきた。北ローデシアを統治していたイギリス南アフリカ会社 British South Africa Company は小屋税や人頭税を導入し、1905年以降には農民たちがそれらの税を現金で納める必要に迫られ、プランテーションや鉱山における賃金労働に従事するようになった (Heisler 1974: 6)。1924年まで北ローデシアの経済開発が大きく進展することはなかったが、1925年に現在のコッペベルト Copperbelt 州付近で銅の鉱脈が発見され、1930年までに次つぎと銅鉱山が操業した (Roberts 1976: 186; 星・林 1992: 153–154)。植民地時代には労働者が単身で銅鉱山へ出稼ぎに行き、出稼ぎ還流型の移動が中心であった（小倉 1995）。

ザンビアが独立した1964年以降、世界的な銅価格の高騰によってザンビア経済は好況であった。独立以前に増えつづけた都市への移住者は、独立直後には激増した（小倉 1995: 22）。都市での賃金は農業所得に比べて格段に高く、1970年代には都市住民の平均所得は農村世帯の約4倍であった (ILO and JASPA 1977: 288)。現金収入にひきつけられ、家族を同伴して都市へ移動する男性が増え、都市への定住志向が強まっていったとされる。仕事を得た労働者が都市へ定住する一方で、失業や退職した人びとが都市で暮らしつづけることは経済的に難しく、親族が居住する農村に避難して

いた（小倉 1995: 30–36）。ザンビアでは今日にいたるまで、農村と都市の経済格差が指摘されつづけ、都市で暮らせなくなった人びとは農村に移住している。人びとは都市ではなく、生活費のかからない農業を営むことを希望して農村へ移住する。人びとは農村への移住後に、トウモロコシやキャッサバなどの主食作物を栽培することで、食料や現金収入を得ることができる。

オイルショックの影響で1970年代後半には銅の取引価格が急落し、ザンビア経済は危機に陥った。1970～1974年には平均で1ポンド当たり158セントだった銅の国際価格は、1975年には平均83セントへ下落し、1980年代になっても一向に回復しなかった（小倉 1995: 64）。ザンビア政府は財政悪化に陥り、1978年に国際通貨基金 International Monetary Fund (IMF) による財政支援を受け入れることになった。1985年には、IMFが導入した構造調整プログラムが日常生活にも影響をおよぼすようになり、ザンビアの基幹食料であるトウモロコシ粉をはじめとした食料や生活必需品などの物価が急騰し、実質賃金は減少した（伊藤 2015: 67–68）。経済低迷のため、ザンビア政府は都市に住む失業者に対して帰村や帰農を促し、困窮する人びとが農村に戻った（小倉 1995）。長いあいだルサカ Lusaka やコッペベルトの都市で暮らした人びとが、出身地域の地方都市に移り住むこともあった（小倉 2009: 139–151）。

複数政党制が導入されてはじめての総選挙が1991年におこなわれ、独立してから長期にわたって政権を握ってきた統一民族独立党 United National Independence Party (UNIP) と党首のケネス・カウンダ Kenneth Kaunda 氏が敗れ、複数政党制民主主義運動 Movement for Multiparty Democracy (MMD) によるフレデリック・チルバ Frederick Chiluba 政権が誕生した。チルバ政権は1987年に前政権が放棄した構造調整政策を再開した。各種補助金の撤廃、農産物の流通自由化、国営企業の民営化といった経済自由化が推し進められたため、失業率は上昇し、人びとの暮らしの悪化とあいまって、都市からの人口流出がみられた (Potts 2005)。

しかし2001年以降には、中国やインドなどの新興国における資源需要の高まりにともなう銅価格の上昇や債務の帳消しが重なり、ザンビア経済は回復はじ



図2 首都ルサカのショッピングモール
首都ルサカには、いくつものショッピングモールが存在する。図中のモールにはスーパー・マーケットや衣料品店、レストランなどのほか、シネマコンプレックスもある。(2013年9月筆者撮影)。

めた。近年では、都市に住みフォーマル／インフォーマルセクターで働く人が増えるだけでなく、農村に生活の拠点をおきながら都市での商売に従事する人も現れている（伊藤2015）。鉱産資源に依存するザンビア経済は資源価格と連動しており、人びとはその変動にあわせるように、農村と都市のあいだを往来する（小倉1995, 2009; Ferguson 1999; 伊藤2015）。

2015年のザンビアの都市人口率は40.9%であり、アフリカ諸国の平均37.7%よりも高い⁷⁾。ザンビアは、アフリカ諸国の中でも都市へ人口が集中する国の一つである（Potts 2005）。ザンビアは、1970年代から1980年代にかけて、都市と農村の所得格差が大きい国として知られており、2000年以降にはその格差がさらに顕著になっているという（小倉2012: 201–202）。現在でも農村と都市の経済発展の差は大きく、首都ルサカだけでなく、コッパーベルトの各都市においても次つぎと大型ショッピングモールが開発されている（図2）。その一方で都市から離れた農村では、多額の現金を必要としない農業を基盤とした自給指向性の強い生活が営まれている。

III 調査地の概要

1. シュークウェ地区の人びとと生業

シューカウエ地区は、県都ムンブウェから約15 km東に位置する（図1）。シューカウエ地区の約



図3 シューカウエ地区の周辺にひろがるミオンボ林
マメ科ジャケツイバラ亜科が優占する乾燥疎開林のミオンボ林。シューカウエ地区の周辺には、現在でも未開墾の林がひろく分布する（2016年3月筆者撮影）。

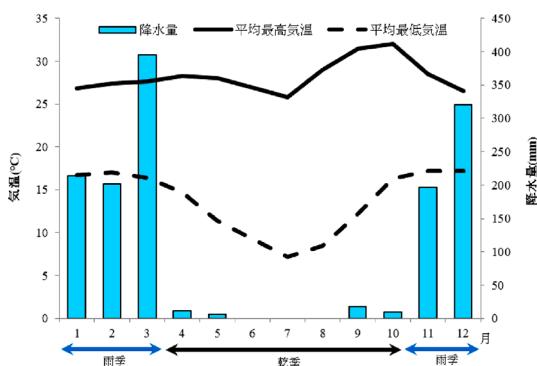


図4 北西部州ソルウェジにおける降水量と気温（2011年）

ムンブウェには気象局の観測地点がないため、シューカウエ地区から北東へ約200 km離れた州都ソルウェジのデータを用いた。

（Zambia Meteorological Department, Ministry of Transport and Communicationsの観測記録より筆者作成）

40 km南には、銅を産するカレンガワ Kalengwa鉱山が立地する。シューカウエ地区の周辺にはミオンボ林がひろがり、標高1,200 m前後でなだらかな丘陵がつづく（図3）。年降水量は約1,300 mmで、季節は4～10月の乾季と11～3月の雨季に分かれる（図4）。2010年に実施された人口センサスによると、ムンブウェ県の人口密度はザンビア国内で最も低い2.8人/km²であった（Central Statistical Office 2012）。2012年8月現在、シューカウエ地区には23カ村あり、合計で243世帯⁸⁾、1,320人が幹線道路近くに住んでいる。世帯主とその配偶者418人の民族は、カオンデが238人（57%）と半数以上を占めており、ルンダが94人（23%）、ルバレが34人（8%）、チョークウェが32人

(8%), ルチャジが18人 (4%), そのほかが2人であった。いずれもバントゥー系の農耕民であり、母系社会で夫方居住を基本としている。

出生地を聞いたカオンデ236人のうち、シュークウェ地区の出身者は106人 (45%)、地区外の出身者は130人 (55%) であった。夫方居住のため、女性は結婚すると夫の出身村へ移住する。また母系制をとるカオンデ社会では、一般的に男性は母方のオジから相続を受けるため、オジの体調不良や死去にともなって母方親族の村へ移住することがある。そのため、地区外の出身者の割合が多くなっている。一方でカオンデ以外の民族175人のうち、シュークウェ地区の出身者はわずか17人 (10%) であった。残りの158人 (90%) は地区外の出身者であり、カオンデ以外の民族の多くは移入者である。

シュークウェ地区の人びとは、焼畑でモロコシやキャッサバ、トウモロコシを主食作物として栽培しており、そのほかにサツマイモやインゲンマメなどを混作している。民族によって嗜好する主食材料が異なっており、カオンデはモロコシ、カオンデ以外の人びとはキャッサバを栽培する（原2016）。トウモロコシはザンビアの重要な主食作物であり、農村部ではひろく換金作物として栽培されている。ザンビア政府は、化学肥料を購入する小農に対して購入費用の一部を補助している。収穫したトウモロコシは自給用として消費される以外に、政府系の食糧備蓄庁Food Reserve Agency (FRA) へ販売される。

カオンデの人びとはブジミ *bujimi* (K) と呼ばれる焼畑農耕をおこなう。未開墾の林を開いた焼畑では、モロコシを中心にトウモロコシやシコクビエ、ゴマ、カボチャ、サツマイモ、インゲンマメなどを混作する。乾季が終わる10月末には、開墾した畑に火を入れる。火入れの1週間後にカボチャやモロコシやトウモロコシ、ゴマを播種する。モロコシは4月に出穂し、7月には収穫される。収穫後には脱穀、製粉して主食のシマ *nshima* (K, L) という練り粥に調理したり、ムンコヨ *munkoyo* (K) という飲み物を醸造したりする（図5）。

しかしモロコシの穀粒は鳥の食害を受けやすいため、出穂から収穫までのあいだ、朝から晩まで畠で鳥を追い払う。12~2月の農繁期や4~8月の収穫期には、カオンデは畠のそばに建てた出づくり小屋で過ご



図5 シマを主食とした食事

トウモロコシのシマと収穫したてのインゲンマメの煮込み。毎食の主食はシマだが、おかずの内容は季節によって変わり、雨季にはマメ類やキノコ、葉菜類、乾季には干した魚や肉類がよく調理される（2016年2月筆者撮影）。

す。近年では仕事量の多い鳥追いや、幹線道路から離れた出づくり小屋に住むことを嫌がり、モロコシ栽培をやめる人も増えている。

ルンダの人びとはムンテマ *muntema* (L) という焼畑において、キャッサバを中心に栽培する。ルバレやチヨークウェ、ルチャジの人びともそれぞれの焼畑農耕を営んでいる。カオンデ以外の4民族の農耕システムは類似しているので、ここでは一括してこれらの人びとの農耕を説明しておく。人びとは土を盛って高さが約40 cmになるマウンドmoundをつくり、キャッサバとともにトウモロコシやカボチャ、サツマイモ、インゲンマメなどを混作する（図6）。11~4月には、マウンドの造成とキャッサバの種茎の植えつけを繰り返す。約30 cmの長さに切り分けた種茎は、イモの収穫がはじまっているキャッサバ畠から採取されることが多い。ときには、親族や友人から種茎を譲ってもらうこともある。

植えつけの半年後には、キャッサバと混作したトウモロコシやサツマイモなどを収穫する。キャッサバのイモは、植えつけから2年が経過した3年目の12月以降に収穫される。3年目には肥大したイモのみを選んで掘りとる。4年目には前年に残しておいたイモが大きくなっているため、株ごと引き抜いてしまう。3年目に小さなイモを残しておき、4年目に肥大してから収穫することで、株あたりの収量を最大化しようとしている（原2016）。キャッサバには有毒成分が含まれているため（Jones 1959; Chiwona-Karltun et al. 2015），収穫後にはイモを水に浸して毒抜きする。毒



図6 開墾して1年目のキャッサバ畑
火入れしたのち、1年目にはマウンドをつくり、キャッサバを植えつける。株間にはトウモロコシやインゲンマメなどを播種する。2年目には混作したトウモロコシやインゲンマメを収穫し、キャッサバのみをマウンドに残す（2012年12月筆者撮影）。



図8 幹線道路に面している村

一軒一軒の家は隣りあっている。人びとは毎朝、隣人たちを訪ねてあいさつを交わしてから畠仕事に向かう（2011年9月筆者撮影）。



図7 キャッサバの乾燥
水を張ったドラム缶に、収穫したキャッサバを皮ごと浸して毒抜きする。毒抜きには、最も暑い10月であれば1日、最も寒くなる6月には4~5日ほど要する。毒抜き後には天日干しし、キャッサバが完全に乾くよう、図中のように生乾きのキャッサバを小さく切り分ける（2014年10月筆者撮影）。

抜きが終わったキャッサバは、天日で干して乾燥させ、杵と臼で製粉して主食のシマに調理する（図7）。

2. シューケウェ地区の成り立ちとカオンデの社会構造

ザンビアには73の民族が居住し、それぞれの人口規模や社会構造は異なっているが、民族ごとにチーフ chief 制度が存在する。ザンビア政府には首長・伝統行事省 Ministry of Chiefs and Traditional Affairs があり、チーフが地域開発の中核を担っている。チーフごとに治める領域が決まっており、カオンデのチーフであるチゼラ Chizela がシューケウェ地区のあるムフンブウェ県一帯を治めている。

カオンデ社会の農村では、7世帯ほどで構成される村 village が最小単位であり、10~30カ村をまとめて地区 ward としている。1人のチーフが治める領域には10地区ほど存在し、チーフが領内の地区と村の地方行政を執りしきっている。もともとカオンデ社会ではチーフは各クランの長であり、カオンデの民族全体をまとめるパラマウント・チーフ paramount chief は存在しない (Jaeger 1981: 72–76)。その地域を治めるチーフに権限が集中することではなく、地区長が新しい住人の居住や土地の開墾を判断して認めている。カオンデ社会において、チーフや地区長、村長は世襲であり、原則として甥（姉妹の息子）が継承する。住民が地区内に新たな村をつくることは容易であり、移入者は移住後に村をつくり村長となることで、土地の分配や親族の受け入れをみずから裁量で執りおこなうことができる。

現在のムフンブウェ県はカオンデのチーフ・チゼラ領であるが、1940年ごろよりポルトガル領西アフリカ（現在のアンゴラ）、ベルギー領コンゴ（現在のコンゴ民主共和国）、ザンビアのカボンボ Kabompo 県からカオンデ以外の民族が次つぎと移入してきたため、複数の民族が混住する県になった⁹⁾。これらの移入者の多くはチョークウェだったというが、ルンダやルバレ、ルチャジなども含まれており、カオンデとは分かれて民族ごとに村をつくった¹⁰⁾。チーフ・チゼラがカオンデ以外の民族を領内に受け入れて土地を与え、居住や新しい村の創設を許したという。その後、北西部州では1960年代に政府の農村開発が実行され、ミオンボ林の中に分散していた村むらが集まって、幹線道路沿いに立地するようになった（図8）。同じころ、

シュークウェ地区にカオンデ以外の移入者が住みはじめたといわれている。

IV 移入者の移住形態

ここでは、移入者30人から聞き取ったライフヒストリーをもとに、シュークウェ地区にみられる移住形態を分類することで、外部者が新しい居住地に移住する経緯について検討したい。2014年1月～2月と2014年9月～2015年3月、2016年10月に、シュークウェ地区に暮らす移入者30人に、生まれてからのライフヒストリーを聞いた。これまでのザンビアにおける移住の研究では、主に農村出身者の都市と農村間の移動について分析されてきた（Ferguson 1999; Cliggett 2003; 小倉1995; 伊藤2015など）。しかし独立以降、都市への人口集中が進み、現在では都市で生まれ育った世代も現れている（小倉2009, 2012）。そのためここでは出生地についても取り上げ、1人の人間が生まれてから現在にいたるまでの移動を検討することで、現代のザンビアにおける移住の特徴を分析したい。

ライフヒストリーから明らかになった出生地と移住の経路をもとにして、移住形態を三つに分類した（表1）。一つ目は「農村→農村型」である。その多くがほかの村から直接シュークウェ地区へ移住してきた人であったが、中にはいくつかの農村を転々としながらシュークウェ地区にたどりついた人もいた。「農村→農村型」の移住を経てきた人の多くは親族の死去、前の居住地でのもめごと、みずからの病気、呪いによる体調不良や不安などの生活環境の悪化を理由としていた。女性の中には、結婚や離婚を理由として語る人も存在した。

二つ目はみずからが生まれた農村から一度都市に移

住し、シュークウェ地区へ移ってきた「都市経由型」である。「都市経由型」の人びとはみな、1950年代以前に農村で生まれていた。彼らは10年以上ものあいだ、銅鉱山や国営企業といったフォーマルセクターに勤め、都市で生活していた。8人のうち6人が、1988年から1994年のあいだに都市からシュークウェ地区へ移り住んでいた。1980年代後半から1990年代前半は、オイルショックや構造調整政策の影響を受け、長いあいだザンビア経済が低迷した時期と重なる。都市では日々の生活に現金が必要であり、人びとは失業や退職したのち、生活費のかからない農業を営んで暮らすことができる農村に移住している。

最後は、都市生まれでシュークウェ地区へ移住した「都市→農村型」である。親が都市で働いており、都市で生まれ育ったのちに、親や親族が住むシュークウェ地区へ移り住んだ人びとである。全員が1960年代から1970年代に生まれていた。彼らの親たちはみな農村生まれであり、「都市経由型」の移住を経てきた。都市生まれの移入者たちは、経済状況の悪化や生活環境の変化によって都市を離れたことにした親や親族に随伴し、シュークウェ地区に移り住んだ。

民族ごとに移住形態をみると、カオンデの移入者7人はどれか一つのかたちに偏るわけではなく、多様であった（表1）。一方でカオンデ以外の23人のうち14人が「農村→農村型」、7人が「都市経由型」と二つに大きく分かれていた。カオンデ以外の23人のうち10人は、親族以外を頼っていた。中には友人や知人ではなく、シュークウェ地区に来て初めて出会った住人に相談して移住した人もいた。彼らはみな、1990年代以前にシュークウェ地区へ移り住んでいた。カオンデ以外の人びとは、移住するまでシュークウェ地区

表1 シュークウェ地区に暮らす移入者の移住形態ごとの人数（人）

| 移入年 | 農村→農村型 | | 都市経由型 | | 都市→農村型 | | 合計 |
|----------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|----|
| | カオンデ | カオンデ以外 | カオンデ | カオンデ以外 | カオンデ | カオンデ以外 | |
| 1970 年代 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 |
| 1980 年代 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 | 4 |
| 1990 年代 | 0 | 7 | 1 | 3 | 3 | 1 | 15 |
| 2000 年以降 | 3 | 2 | 0 | 1 | 0 | 1 | 7 |
| 不明 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 合計 | 3 | 14 | 1 | 7 | 3 | 2 | 30 |

（聞き取り調査により筆者作成）

とのつながりをもっておらず、さまざまな場所を転々としたのち、チンサフという保証人を通して初めて訪れるシュークウェ地区にたどり着いた。最近のカオンデ以外の移入者は、保証人を頼って移住した親族によってシュークウェ地区へ移り住んでいる。

V 移入者のライフヒストリー

本章では、保証人を頼ってシュークウェ地区へ移住したムシピ、イトカ、カトンゲという男性3人のライフヒストリーをみていく¹¹⁾。それぞれが移住のときに頼った保証人に着目することで、外部者が新しい居住地に受け入れられていく過程を明らかにしていく。移入者をシュークウェ地区へ受け入れる役割を担う保証人は、ルンダ語でチンサフ *chinsahu* (L) と呼ばれている。チンサフは移入者の人柄や経歴をよく知っている、移入者の身元を引き受け、移住後の生活も支援する。チンサフは英訳すると *witness* であり、事件・事故の証人や証拠という意味で日常的に使われている。チンサフが村びとたちに対して移入者の身元を保証して責任を負う役割も担うことから、本稿では保証人と呼ぶことにしたい。以下では、3人がシュークウェ地区へ移住してきた経緯と過程、移住直後の生活に焦点をあてながら、1人ずつのライフヒストリーを検討していく。本稿で取り上げる3人は、いずれもカオンデ以外の移入者の中では、早くにシュークウェ地区に移住してきた人びとであり、親族以外の保証人を頼っていた。移入者のライフヒストリーの中で、特に保証人に着目して、移住に果たすその役割について考察するため、この3人を取り上げる。

1. 都市での飲み友達を頼ったムシピ

ルンダのムシピは、1930年に北西部州チャブマ Chavuma県の農村で生まれ、2016年のインタビュー当時86歳であった。現在シュークウェ地区のA村でひとり暮らしをしているが、同じ村に息子や娘の世帯が住んでおり、農作業や家事などを助けてもらっている。彼は1962年に結婚して、都市で仕事を得られるといううわさを聞き、1968年にコッパーベルト州の都市ンドラ Ndolaへ行った。その当時、弟がンドラの準国営企業 National Agricultural Marketing Board (NAMBOARD) の

事務所でマネージャーとして働いており、彼を頼ってトウモロコシの運搬係の職を得た。ンドラでは、妻や子どもたちとともに弟の家に居候した。その後1971年にNAMBOARDでの職を失い、その年にシュークウェ地区へ移住した。

ムシピの話によると、都市では職をもち、現金収入を得ることができないと暮らしていくことが難しいため、失業したときに農村に移り住むことにしたという。移住のときには、ンドラの酒場で知りあったカオンデ男性のムンバを頼った。ンドラでは、ムンバはムシピと同じ居住区に住んでおり、森林保護区のレンジャーとして働いていた。ムシピは毎日、仕事が終わると一度帰宅し、水浴びをして服を着替えて酒場へ出かけていた。ンドラの酒場では、モロコシとトウモロコシからつくられたチブク Chibuku という市販の醸造酒を好んで飲み、同じ居住区の人びとと歓談 *kuhanjika* (L) することを楽しみとしていた。そのうちの1人がムンバであり、両人は同じ北西部州の出身ということで意気投合し、それぞれの故郷についてよく話した。ムシピはムンバの故郷であるシュークウェ地区では未開墾の林が豊富なこと、周辺には多くの野生動物や魚が生息していることなどを聞いた。両人は、都市で共通語となっていたベンバ Bemba 語やムンバの母語であるカオンデ語で会話をした。1970年にムンバは退職し、シュークウェ地区の地区長になった。

1971年9月に、ムシピはンドラに住んでいたイトコ

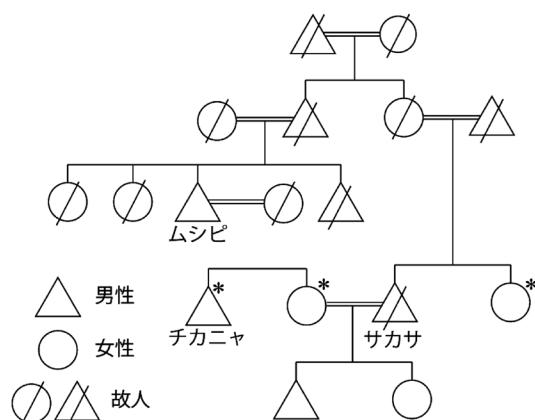


図9 ムシピ（86歳）の話に出てくる人物とその親族関係（2016年10月現在）

*印は、ムシピに聞き取った2016年10月現在において、消息が不明の人物。

(聞き取り調査により筆者作成)

のサカサとともに、家族を連れてンドラを発った（図9）。彼らはムンバを頼ってシュークウェ地区へ移動した。シュークウェ地区に到着すると、偶然イトコの妻の兄チカニヤが住んでいた。そのため到着した日には、初対面であったチカニヤの家に滞在させてもらい、翌日に友人であるムンバ地区長を訪ねた。ムシピはムンバと雑談したあと、居住地と耕作地を分けてもらった（図10）。その後ムシピとイトコは、4日間かけて萱と丸太、粘土を用いた簡素な仮住まいを建てた（図11）。そのあいだ、彼らとその家族はチカニヤの家で暮らした。翌年の5月ごろに雨季が終わり、日干

しレンガの家を建てはじめた（図12）。

移住直後の1971年には、ムシピはムンバとチカニヤが分けてくれた土地（2リマ lima¹²⁾ = 約0.5 ha）を耕作し、キャッサバを植えつけた。そのほかにチカニヤから0.25リマに植えつけられたキャッサバの株を譲り受け、さらに0.5リマ分のキャッサバの株を購入した。キャッサバの株は、面積を単位として売買、贈与のやりとりがなされ、キャッサバの種茎とイモの両方を手に入れることができる。またキャッサバのほかに、トウモロコシとラッカセイの種子をチカニヤから借り、翌年の収穫後に同量の種子を返却した。

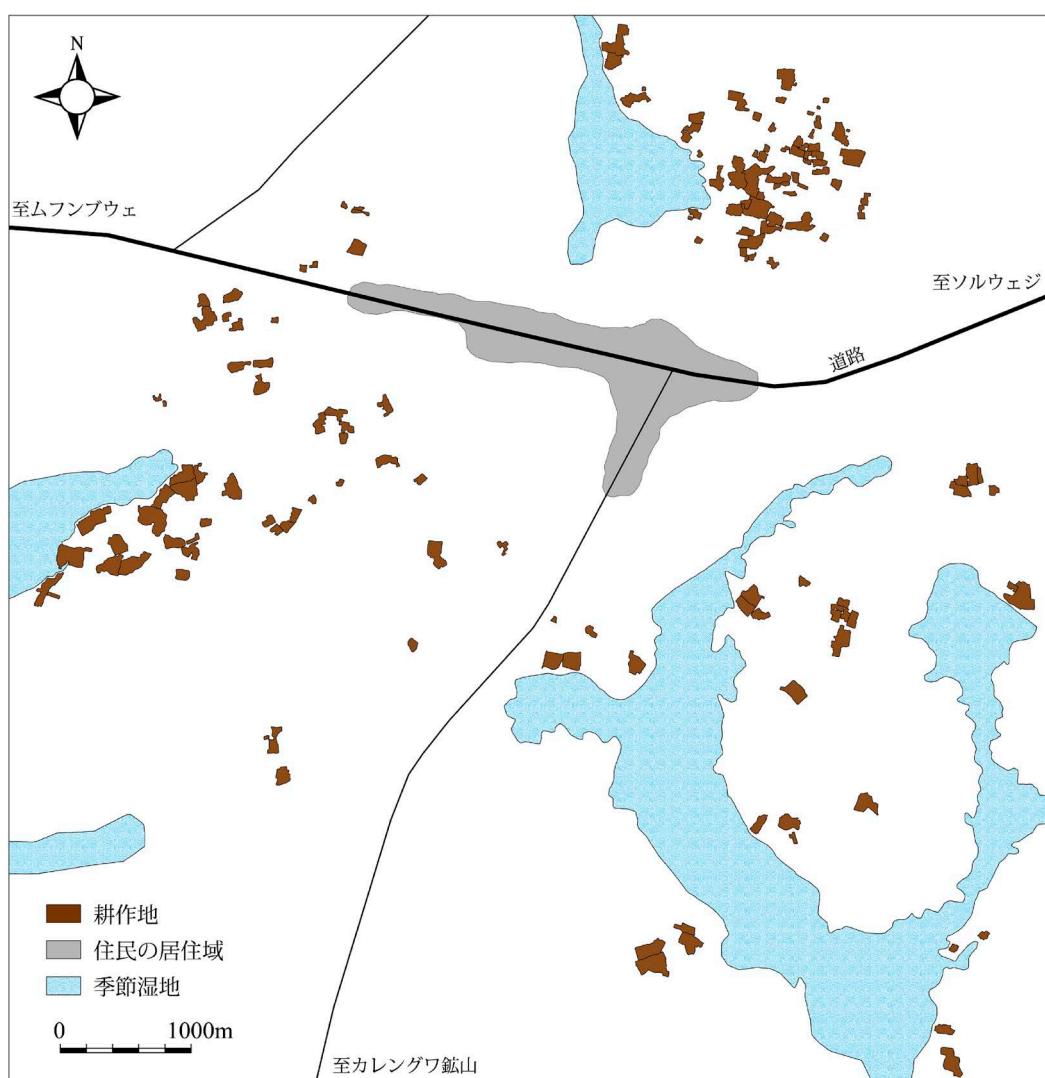


図10 シュークウェ地区における耕作地の位置（2014年2月）

地区内8カ村の住民の耕作地の位置を示した。カオンデ農村では、地区長が村ごとに耕作地の範囲を割り当てる。村が異なる住民どうしで土地を融通しあうこともある。多くの人びとは、幹線道路沿いの村から5km以内を耕作している。図中の空白地は、8カ村以外の住民の耕作地のこともあるが、多くが未開墾の林である。

（調査結果より筆者作成）



図11 移入者が住む仮住まい

仮住まいは丸太と粘土で簡素につくられていて壊れやすいため、長いあいだ住むことができない。多くの移入者は、移住した翌年の乾季に日干しレンガの家を建てる（2016年2月筆者撮影）。



図12 日干しレンガの家

雨季が終わると、移入者は日干しレンガの家を建てはじめた。移入者は自分たちで日干しレンガをつくり、建材に使う丸太や萱を林から採ってくる。移住して数年が経つと、トタンを買う人もいる（右）（2014年10月筆者撮影）。

ムシピは食料をもたずに移住してきたため、暮らしへじめた当初には地区の小さな商店でトウモロコシ粉を購入した。多くの野生動物が周囲に生息していたため、狩猟することでおかず困ることはなかったという。ワナ猟をしていたムシピは、獲った獣肉と交換することでカオンデの隣人から魚入手することもあった。ムシピは、「地区内をあてもなく歩き回って *kuima-jala* (L), おかげのやりとりや談笑する中で、少しずつ近隣の人びとと知りあった」と振り返った（図13）。

ムシピは失業をきっかけに都市での生活を断念し、帰村するのではなく、飲み友達であったムンバを保証人としてシュークウェ地区へ移住した。保証人のムンバが地区長であったこともあり、ムシピは容易に受け入れられ、居住地や耕作地を手に入れることができた。移住の直後には、保証人たちの助けを得て畑の耕

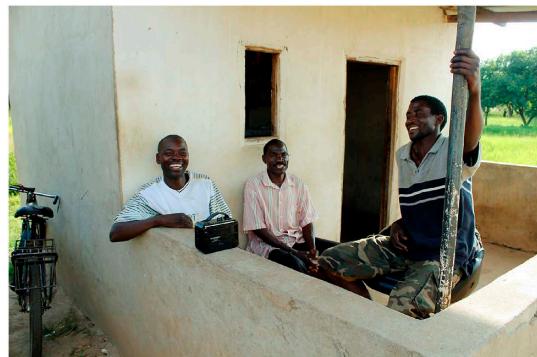


図13 夕方に商店で談笑する村びとたち

シュークウェ地区の中心のバス停には数軒の商店があり、ほかの地域から来た訪問者は、まず商店にいる人びとと話す。夕方には畠仕事を終えた住民が商店に集まっており、移住したての人や訪問者も会話を輪に加わる（2015年2月筆者撮影）。

作をはじめ、生活する中で近隣の人びとと知りあって社会関係を構築した。

2. その場で知りあった人物を頼ったイトトカ

ルンダのイトトカは、1917年にザンベジZambezi県の村で生まれ、1995年にシュークウェ地区で亡くなっている。そのため本節におけるイトトカのライフヒストリーについては、彼の息子から聞き取った話をもとに構成している。1946～1960年にはコッパーベルト州の都市キトウェ Kitweで働いていたが、失業を機にソルウェジSolwezi県の農村へ移り住んだ。1963年にソルウェジ県の村で息子が生まれた。その後1985年に兄弟間で勃発した村長争いに敗れたため、シュークウェ地区へ移住した。

1985年11月のある日、村長の座を争ってイトトカと兄弟たちが衝突した。その結果、イトトカが村長を辞めて村を離ることになった。イトトカの息子によると、イトトカ村はアンゴラで創設された由緒ある村である。歴史のある村の村長を務めることは、ルンダをはじめ、この地域の男性にとって誇り高いことである。イトトカの兄弟たちは村長のイトトカに対して不満をもち、村長の座を奪った。イトトカは村に住めなくなつたため、移住先を探しにムンブウェ県を訪れた。多くの野生動物が生息しており、土がよいといううわさを聞いたことがあったからである。たまたまシュークウェ地区の道路沿いに住んでいたルバレ男性のサムコンガに出会った。両人は歓談する中でお互い



図14 トウモロコシを販売する商店

シュークウェ地区の商店では、主食のトウモロコシやおかずとなる乾燥マメ、乾燥小魚、調味料、生活雑貨、自転車の部品などが販売されている。移住したばかりの人びとは、毎日のように商店で食料を購入する（2012年6月筆者撮影）。

のことを知り、イトカは彼に「わたしの村をつくりたい」と相談した。その翌日に両人は地区長を訪ね、移住して新しく村をつくりたい旨を伝えると、地区長は移住を許可した。

翌週にはイトカはソルウェジ県の村に戻り、両人の妻と妹、子どもたちの合計10人を連れてシュークウェ地区へ移住した。はじめは友人サムコンガの家の台所に滞在し、食事を分けてもらっていた。12月には自分が建てた仮住まいに家族とともに住みはじめ、食料を購入してまかなかった（図14）。ときには近隣の人びとの畠で働き、その報酬としてキャッサバを得ることもあった。狩猟の技術をもっており、みずから猟にてかけて獣肉を獲っていたため、おかずに困ることは少なかった。

イトカはサムコンガから耕作地を分けてもらい、キャッサバやサツマイモなどを育てはじめた。持参したキャッサバとサツマイモの種茎のほかに、サムコンガが歓迎の証として分けてくれたキャッサバの種茎を植えつけた（図15）。そのほかに隣人から0.5リマ分のキャッサバの株を購入し、サツマイモの種茎を分けてもらった。

村長争いに敗れてやむなく移住したイトカは、うわさを頼りにたどり着いたシュークウェ地区で、親密になったサムコンガを保証人とした。彼は村長を辞めざるを得なかつたこともあり、みずからの村をつくり、村長になることを熱望していた。みずからの村をつくり、チーフに村長として登録されることで、地区



図15 友人から譲り受けたキャッサバの種茎
移入者は移住直後には、友人や隣人たちの畠を訪ね、キャッサバの種茎を分けてもらう。譲ってもらった種茎を束にして畠に運び、植えつけていく（2013年1月筆者撮影）。

長から土地を割り当てられるため、土地の分配や親族の受け入れなどをみずからの裁量で執りおこなうことができるようになる。ザンビアでは村の登録を認める権限がチーフに存在し、チーフによって認められると、実質的に村長が行政を執りおこなうことができる（児玉谷1999）。イトカは移住当初から村長となることで、移入者であっても、みずからの裁量で暮らすことができる。サムコンガや知りあった近隣の人びとから食料や種茎を得て助けてもらうことで、最初の1年間を乗り切った。

3. 同僚の縁で移住したカトンゲ

ルバレのカトンゲは1936年に、西部州カオマKaoma県の農村で生まれ、2015年のインタビュー当時79歳であった。現在は1996年につくったK村で妻と未婚の子供2人と暮らし、村長を務めている。K村ではほかに息子たち5世帯が生活している。カトンゲは若いころ植民地政府の斡旋によって、1951～1955年に南ローデシアのタバコ農場と南アフリカの鉱山で働いていた。その後1966年に、安価に衣服が手に入るといううわさを聞いてコンゴ民主共和国を行った。ザンビアとの国境近くの都市で炭焼きに従事し、片言のスワヒリSwahili語で木炭を売った。林が遠く、家

が密集する都市では、毎日薪を入手することは難しく、燃やすと煙が出る薪を使うことができないため、木炭が重宝されている。彼は木炭から得る収入だけで暮らすことが厳しく、北西部州の都市ソルウェジへ移動した。1968~1993年にはソルウェジの国営牧場で搾乳係として働き、そのあいだに現在の妻と結婚した。定年退職を機にシュークウェ地区へ移住した。

退職後の1993年12月、妻と子どもたちとともにシュークウェ地区へ移り住んだ。シュークウェ地区には親族はおらず、牧場の同僚であったルンダ男性のマスンバを頼って移住した。マスンバは警備員として、カトンゲとともに20年にわたって牧場で働いた。両人は同僚というだけではなく、仲の良い友人でもあった。カトンゲの退職前である1988年にマスンバは、前節で取り上げたイトトカを頼ってシュークウェ地区へ移住していた。カトンゲによると、長く都市に住んでいたことでモノやカネをもっていると思われて親族から妬まれるため、出身村には戻らず、シュークウェ地区へ移り住むことにしたという。

カトンゲはシュークウェ地区に到着した後、すぐに

マスンバを訪ね、「シュークウェ地区に住みたい」と相談した。そのときマスンバはとても喜び、カトンゲを歓迎した。はじめの3日ほどマスンバの家に居候し、食事を提供してもらった。この3日のあいだにカトンゲは、F村に住むことを決め、マスンバとふたりでF村の村長に相談した。村長は居住を許し、居住地と耕作地を分配した。カトンゲは、保証人のマスンバと村長とともに地区長を訪ね、F村に住みたいという希望をもっていることを伝えた。地区長はカトンゲの移住を認めた。はじめの2週間、カトンゲは村長の娘が貸してくれた家に滞在しながら、手伝いを雇って丸太と粘土で仮住まいを建てた。4月になってから日干しレンガの家を建てはじめた。

移住した直後には牧場からもらった退職金の一部で、0.5リマ分のキャッサバの株を村長から購入した。そのキャッサバのイモを食事として消費し、種茎を自分の畑に植えつけた。また村長以外にも、近隣の数人からキャッサバの種茎を購入した。カトンゲは村長から分配された耕作地だけでは不十分と考え、そのほかに2人のカオンデから耕作放棄地を購入した¹³⁾（図

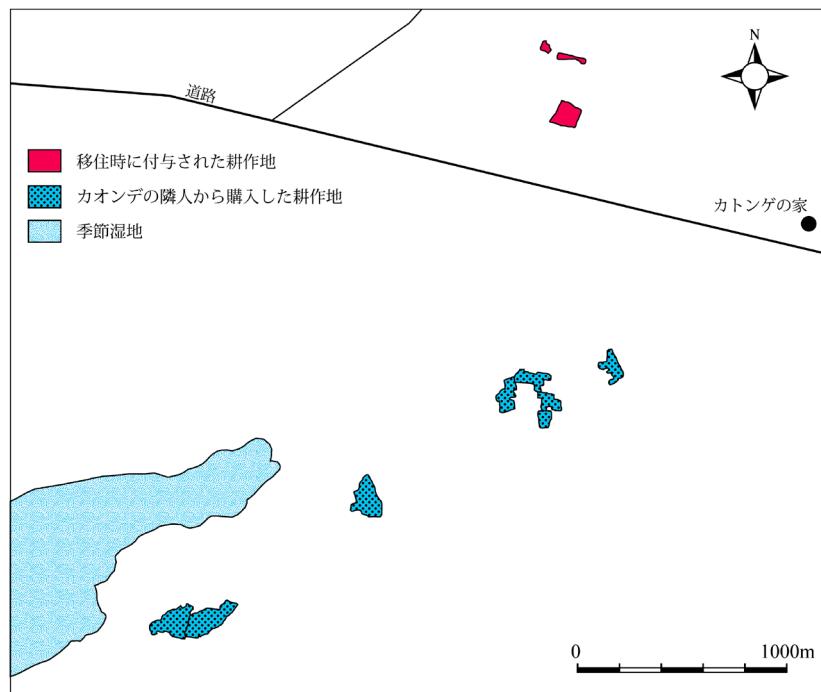


図16 カトンゲの耕作地

移住直後にカトンゲは、カオンデの隣人に相談し、村から離れた放棄地を購入した。2014年2月現在では、これらの耕作地を息子たちとともに耕している。

(調査結果より筆者作成)



図17 モロコシからつくられたムンコーヨを飲む村びとたち

訪問者が来ると、モロコシからつくった飲み物ムンコーヨをふるまう。友人や隣人たちを招き、訪問者と歓談することもある。こうした会話の中で、移住の相談がなされることが多い（2014年11月筆者撮影）。

16). カトンゲは移住したころの厳しい生活を回顧して、「F村に移住してからは、貯金や退職金で食料を買っていたので、暮らすのが大変だった。しかし畑を耕して食べるものを手に入れられるようになると、暮らしがずっと楽になった」と語った。

カトンゲは話の中で、「移住した直後にはよそ者 *angeinji* (L) であるため、シュークウェ地区での居心地が悪く、地区内をあてもなく歩き回って、居住者 *mwenyimbu* (L) と歓談して過ごす中で、知り合いを増やした」と振り返った（図17）。シュークウェ地区に住んでいることを知らせるため、移住の翌年（1994年）にカオマ県に住むイトコ2人を訪ねた。カトンゲは帰村について、「イトコたちは（出身）村を離れる前から仲がよかったので、（カトンゲが）ソルウェジにいた1976年と1989年にも会いに行ったが、3人のキョウダイたちは1966年に村を離れてから一度も会っていない。いま彼らがどこに住んでいるかもわからない」と話した。

都市で国営企業に長く勤めたカトンゲは、出身村を離れてからは親族とほとんど連絡を取ってこなかった。退職後には親族に妬まれることを怖れて、帰村せずに同僚のマスンバを保証人としてシュークウェ地区へ移った。彼は移住後に、働いていたときの貯金や退職金といった持ち金を切り崩して生活した。カトンゲは、先にシュークウェ地区へ移住したマスンバの紹介によってF村の村長や地区長と出会い、移住後に知り合いを増やし、少しずつ生活基盤を築いた。

VI 考察：平穏に暮らす戦術としての移住

本稿では、シュークウェ地区に暮らす移入者のライフヒストリーにみられる移住について（1）移住形態、（2）移住を通した社会関係の構築、（3）移住における保証人の重要性の3点から考察し、現代のザンビアにおける移住の特徴を明らかにする。

1. 三つの移住形態

一つ目は、移住経験の分類から明らかになった移住の三つの形態である。「農村→農村型」の移住を経てきた人びとは、親族間のもめごと、親族の死去、呪いによる体調不良などの生活環境の悪化を移住の理由としていた。親族が亡くなったときには、その人を殺した土地として、そこに住みつづけることは忌み嫌うべきことである（大山2011）。人びとは、妬みや呪いに端を発した葛藤やいさかいを解消するため、居住地を変えることもある（杉山2007）。このような移動性は、ミオンボ林帯に暮らす焼畑農耕民には共通してみられる。

シュークウェ地区における「都市→農村型」の移入者は、1960年以降に都市で生まれている。その多くはカオンデであった。彼らの両親や親族は農村生まれであり、都市で働いていた。「都市→農村型」の人びとは、都市でともに暮らしていたカオンデの両親や親族にともない、シュークウェ地区へ移住した。Ferguson (1999) は移住者本人が生まれた村でなくとも、両親や親族が暮らす村に帰ることもひろく帰村と定義する。「都市→農村型」の移入者もまた、親族が居住する村へ帰村していた。

ザンビアでは、独立以前から経済危機に陥る1970年代まで、国内における労働需要が増えつづけていた（小倉1995；伊藤2015）。独立直後には解放感と独立への期待から、人びとは農村から都市へ引きつけられたという（小倉1995: 20）。「都市経由型」の人びとは、ムシピやカトンゲのように現金収入にあこがれ、都市へ移って就職した。しかし1970年代中ごろからは経済危機、1980年代後半からは構造調整プログラムが始まり、都市居住者は生活に困窮するようになっていた。「都市経由型」の人びとは、都市で多額の現金を必要とする生活をつづけるのではなく、農村に住

み農業に従事して食料を自給することを望み、シュークウェ地区へ移住している。カトンゲは定年まで勤めつづけて退職金を手にしたが、インフレが進む不安定な都市で、定期的な現金収入を得ずに暮らしつづけることは困難であった。

「都市経由型」の人びとは、小倉（1995, 2009）が報告するように親族が暮らす出身村に戻ったわけではなかった。都市での生活は実態がどうであれ、村に残る親族や友人から羨望のまなざしを受けるものである。村びとにとって、都市に暮らす親族は生活費の支援や、パンや洋服などの都市でしか手に入らないおみやげをもたらす存在である。しかしムシピが語ったように、都市では毎日の食料や生活必需品を購入し、借家に住まなければならず、現金収入が不可欠である。現金収入を得ることができなくなると、とたんに窮乏する。都市での生活に見切りをつけた人びとは、友人を保証人として初めて訪れるシュークウェ地区へ移り住んでいる。

アフリカでは都市でも農村でも、人びとは親族に対して定期的に食料や現金などを贈ることで、親族間のつながりを保持しつづけている（Crehan 1997; Cliggett 2003; Frayne 2004）。逆に親族とのつながりを保持していないかった人びとは、困窮したときに親族を頼ることができないのである。カオンデの社会では食料や現金をもつ者は、両親やキヨウダイ、祖父母をはじめとした親族を支援する義務を負っており、義務を果たさなければ呪われると信じられている（Crehan 1997: 222）。「都市経由型」の移入者の多くは、みずからの都市生活の中で頻繁に親族と連絡を取っておらず、Ferguson（1999）が言及するような出身村での妬みに起因する呪いや社会的な排除、孤立を避けて新しい土地に移住しているのである。

2. 移住を通した社会関係の構築

二つ目は、移入者たちが新しい土地への移住を通して構築した社会関係である。カオンデ以外の移入者は、新たな居住地としてシュークウェ地区へ移住していた。彼らは失業や退職にともなう経済的な不安、親族の死去やもめごと、呪いによる体調不良といった不穏の中で暮らしつづけるのではなく、生活環境が悪化する前の平穀な生活を維持するために移住を決意している。カオンデ以外の移入者はこれまでの人間関係と

距離をおくために、よそ者として初めての土地へ移住したといえる。

そのときにはカオンデ以外の移入者は、親しい友人を保証人として移住していた。これまでつながりのなかった土地への移住では、親族を頼ることができない。移住の成否は、保証人となる人物とのあいだに信頼できる関係があるかどうかによって決定づけられる。都市生活で知りあった飲み友達や職場の同僚といった親密な友人だけでなく、偶然会って親しくなった人物も保証人となる。移入者本人と保証人となる人物とのあいだで醸成される人間関係が重要となる。ときにはムシピと地区長のように、民族の近接性や言語の類縁性がきっかけで移入者と保証人が接近することもある。

シュークウェ地区では、最終的に地区長が新たな住人の居住の可否を判断するため、保証人が移入者を地区長に紹介する。カオンデであれ、ルンダであれ、民族に関係なく、移入者たちは地区長によってすぐに移住を許してきた。それは地区長が日常的に地区内を歩き回り、住民と歓談することで訪問者の存在や評判、居住環境の変化、もめごとなどを把握できるよう努め、住民が快適に暮らせるように配慮しているからだとされる。住民のひとりひとりの生活を気づかう地区長は、住民から慕われて信頼kukufwelele (L) されている。住民は地区長の人となりを、人を受け入れる寛大な心lukon'u (L) をもつ人であると高く評価する。ザンビアの地方行政では、チーフや地区長、村長といった伝統的権威に大きな権限が与えられている。シュークウェ地区では寛大な地区長の裁量によって、移入者は受け入れられている。地区長や村長が保証人に連れられた移入者の居住希望を認めたとき、地区長や村長も保証人のひとりに加わるのである。

カオンデ以外の移入者は、保証人をきっかけとして地区内で人間関係を築いている。保証人を頼るだけではなく、移入者自身が地区内を歩き回って、近隣の人びとと知りあうように努めていた。歩き回って歓談するふるまいは、カオンデ社会では親しい間柄において頻繁におこなわれ、人びとはお互いの関係を確かめあっている（大山2011）。カトンゲが語ったように、移入者は新しい土地で隣人たちと親しくなるため、積極的に地区内を歩き回る。移入者は毎日の暮らしの中で知り合いを増やし、よそ者ではなく、やがて居住者

として周囲から認められるようになる。彼らは地区長のように寛大な保証人の助けを借りながら、居住地や耕作地を得て生活基盤を整え、近隣の人びとから食料や種子を手に入れることで、最も苦労する移住直後の暮らしを乗り切っていた。カオンデ社会では人はケチであってはならず、気前よく、寛容でなければならぬ（大山2011）。移入者たちは、住民の寛大な心やみずからが築く人間関係によって、移住を実現させて新たな暮らしをはじめている。

3. 移入者と地域社会をつなぐ保証人の重要性

最後にここまで検討してきた移住について、保証人チソフの存在が不可欠であったことを指摘したい。保証人チソフは、政府や伝統的権威が制定する公的な制度や仕組みとして存在するわけではなく、個人の人間関係のもとに成り立っている。保証人のような移住のときに移住者が頼る存在は、世界各地の移住においてもみることができる。

ロシアでは農村に暮らす若者たちが、公的な制度で十分に保障されていない教育や仕事のため、親族や知人といったインフォーマルな社会関係を頼って移住し、希望する就学や就職を実現している（Walker 2010）。西アフリカのソニンケ Soninke商人は親族や同郷の友人、知人をたどることで、西アフリカ域内だけでなく、中国や東南アジアにまで進出し、みずからの商売の成功を収めている（三島2016）。ガーナでは、かつてサバンナ地帯との長距離交易の宿営地であったゾンゴ zongoが、現在では移住者のつくった新しい集落として各地に存在している。出稼ぎやビジネスを目的とした人びとは、ゾンゴに住む親族や友人を頼って移住している（桐越2016）。これらの移住にみられる移住者を受け入れて支える人物のひとりひとりもまた、本稿で論じてきた保証人と同様の役割を担っているといえるだろう。人びとは社会関係を頼りに移住することで、より安定した暮らしを獲得しようと努めている。

親族を中心とした社会関係が、移住の決意や移住先での受け入れといった移住の過程において、重要な役割を果たすことは指摘されてきた（Muanamoha et al. 2010; Joseph and Khan 2015）。シュークウェ地区では、親族ではない保証人が責任を負って移入者を受け入れ、移住後の生活を支援していた。保証人が受け入れ

先の地域社会と移入者のあいだに立ち、双方をつないでいる。保証人は公的な制度や仕組みとして確立されているわけではなく、移入者が信頼を寄せる人物が、社会の中で保証人としての役割を担う。保証人が旧知の友人である必要はなく、その場で知りあった人物を保証人として頼ることもできる。保証人が居住する期間の長短も関係なく、カトンゲの保証人となったマスンバのように移入して間もない人物も保証人の役割を果たす。保証人は移入者を地域の住民に紹介するため、日常的に近隣の人びとと交流している人物であることが望ましい。つまり地域の中で人間関係を保持する住民であれば、だれもが保証人になり、移住の希望者を受け入れる可能性をもっているのである。

アフリカでは資源利用や社会関係との兼ねあいから、居住地が決まることが指摘されている（たとえば野中2014）。シュークウェ地区の移入者は、保証人を頼って移住して暮らしているが、ムシピやカトンゲのように、移住後には雑談や歩き回ることを通して、少しづつ近隣の人びとと社会関係を構築していた。移入者たちの移住後の居住場所については、保証人によるところが大きかったが、その後の生活では少しづつ保証人以外の住民とのかかわりが増えている。本稿で取り上げた人びとは、保証人との関係を基本としながら、移住後には少しづつ人間関係を築きながら生活している。しかし、もともと見ず知らずであった移入者と保証人や住民とのあいだで形成される信頼関係は確固たるものではなく、移入者たちに何か問題が生じたとき、追い出される可能性も示唆される。移住後に、移入者たちが村での生活の中で築く社会関係や、それにもなう居住場所の変更などについては、今後詳しく明らかにしていく必要がある。

アフリカでは古くから、個人がよそ者と地域社会をつなぐ役割を果たしてきた。植民地時代には、支配する側の植民地政府と支配される側の現地社会をつなぐエージェントとなったコラボレーターという人物が存在した（栗本1999: 163）。コラボレーターは現地人であり、植民地政府に情報を提供し、通訳として働いただけでなく、現地社会に共通語や新しい生活習慣を浸透させる主導的な役割も果たした（栗本1999: 164）。このような仲介役の存在は、仲介者とよそ者、仲介者と地域社会のそれぞれのあいだで構築される人間関係

があつてはじめて機能する。保証人もまたコラボレーターのように、個人が保持する親密な人間関係を礎として、よそ者である移入者と受け入れ先の地域社会をつなぐ。保証人となるかならないかは、両者のあいだで醸成される信頼関係によって決まり、その信頼関係は人を通じて連鎖している。現代のアフリカ農村では、制度や仕組みといった公的な枠組みだけではなく、日常生活で築かれる人間関係をもとに保証人という存在とその連鎖によって、人びとは不安定な生活環境から脱し、新しい土地へ移住して新たに生活をはじめることができるのである。

謝 辞

本稿にかかる現地調査および資料収集は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科フィールドワーク・インターンシッププログラム（2011～2012年度）、日本学術振興会科学研究費補助金・特別研究員奨励費（13J02843: 2013～2015年度）、日本科学協会笹川科学研究助成（28-114: 2016年度）によって可能となりました。本稿の執筆にあたっては、大山修一先生（京都大学）より御助言を賜りました。心より感謝申し上げます。なお本稿の骨子は、2014年日本地理学会春季学術大会（於：国士館大学）ならびに、2015年人文地理学会大会（於：大阪大学）において発表しました。

注

- 1) カオンデはルバ王国を祖とする民族であり、現在ではザンビア北西部州カセンパ県とソルウェジ県、ムンブウェ県に居住している。
- 2) 本稿ではシュークウェ地区に暮らすルンダとルバレ、チョークウェ、ルチャジをまとめてカオンデ以外と呼ぶことにする。
- 3) 本稿では、ルンダ語またはカオンデ語をイタリックで表記している。カオンデ以外のルンダとルバレ、チョークウェ、ルチャジの4言語については、併記して読みにくくなることを避けるため、カオンデ以外の4民族の中で最も人口が多いルンダ語のみを表記している。なおルンダ語には末尾にLを、カオンデ語にはKを併記する。
- 4) ミオンボ林は、マメ科ジャケツイバラ亜科が優占

する乾燥疎開林であり、アフリカ中南部の標高が800～1,600 mほどの比較的冷涼で、年降水量が1,000 mm前後の地域に分布している。

- 5) クランは出自を具体的にたどることができないが、共通の出自であると認識される集団のこと。カオンデの場合には、クランの名前が動物や植物といった自然物になっている。同じクランどうしの結婚は禁忌である。
- 6) ルンダ王国のはじまりについては諸説ある。たとえばMcCulloch (1951) は、15世紀後半にルンダの最初のリーダーが現れたと記述している。
- 7) The World Bank, World Development Indicators, Urban Population (% of total) による。 <http://data.bank.worldbank.org/data/reports.aspx?source=world-development-indicators> (最終閲覧日: 2016年11月29日)
- 8) 本稿では台所と食料を共有し、生計を同一にする人びとを一つの世帯とする。多くの世帯は、夫婦とその子どもたちから構成される核家族に相当する。
- 9) ザンビア国立公文書館National Archives of Zambia所蔵の*Kasempa Tour Reports 1956* (NWP1/2/80) および*Kasempa Tour Reports 1957* (NWP1/2/89) による。
- 10) ザンビア国立公文書館所蔵の*District Travelling Reports: Kasempa 1949–50* (NWP1/2/25) による。
- 11) 本稿に登場する個人名はすべて仮名であるが、ザンビアに実存する名前を使用する。
- 12) リマはザンビアで一般的に用いられている面積の単位で、1リマは50 m四方、つまり約25 aである。
- 13) イギリス植民地政府による間接統治においては、各民族の慣習法にもとづいた土地の共同保有が認められていた (Brown 2005)。現在では、土地はすべて大統領に帰属している。1995年に制定された土地法では99年間の土地使用権と売買が認められ、事実上、土地の私的保有が認められたとされている (大山2015)。また慣習地においても、チーフの承認を得ることで土地権利を取得できるようになった。現在でもチーフは土地利用の管理権や村びとへの土地配分権を実質的に保持しており、チーフはみずからが支配する領域で村長に土地を分配し、村長が村びとへ土地を与えていく (児玉谷1999)。村びとたちは、伝統的権威か

ら与えられた土地を売買しているが、実際には使用権を売買することになる。

文献

- 網中昭世 2014. 『植民地支配と開発——モザンビックと南アフリカ金鉱業』山川出版社。
- 伊藤千尋 2015. 『都市と農村を架ける——ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』新泉社。
- 大山修一 2011. アフリカ農村の自給生活は貧しいのか? E-journal GEO 5: 87–124. <http://doi.org/10.4157/egeo.5.87>
- 大山修一 2015. 慣習地の庇護者か、権力の濫用者か——ザンビア1995年土地法の土地配分におけるチフの役割. アジア・アフリカ地域研究14: 244–267.
- 小倉充夫 1995. 『労働移動と社会変動——ザンビアの人々の営みから』有信堂。
- 小倉充夫 2009. 『南部アフリカ社会の百年——植民地支配・冷戦・市場経済』東京大学出版会。
- 小倉充夫 2012. 変化する都市住民の特徴と青年層. 小倉充夫編著『現代アフリカ社会と国際関係——国際社会学の地平』175–204. 有信堂。
- 掛谷 誠 1993. ミオンボ林の農耕民——その生態と社会編成. 赤阪 賢・日野舜也・宮本正興編著『アフリカ研究——人・ことば・文化』18–30. 世界思想社。
- 加藤 太 2011. 沼澤原の土地利用をめぐる民族の対立と協調——キロンベロ谷の事例. 掛谷 誠・伊谷樹一編著『アフリカ地域研究と農村開発』91–119. 京都大学学術出版会。
- 柄谷利恵子 2016. 『移動と生存——国境を超える人々の政治学』岩波書店。
- 桐越仁美 2016. コーラナツツがつなぐ森とサバンナの人びと——ガーナ・カカオ生産の裏側で. 重田眞義・伊谷樹一編著『アフリカ潜在力4 爭わないための生業実践——生態資源と人びとの関わり』85–118. 京都大学学術出版会。
- 栗田和明 2016. 移動する人の現状と研究視点——移民の文化への注視. 栗田和明編著『流動する移民社会——環太平洋地域を巡る人びと』159–168. 昭和堂。
- 栗本英世 1999. 討伐する側とされる側——すれちがう相互認識. 栗本英世・井野瀬久美恵編著『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』146–169. 人文書院。
- 児玉谷史朗 1999. ザンビアの慣習法地域における土地制度と土地問題——中央州のある村の事例を中心に. 池野 旬編著『アフリカ農村像の再検討』117–170. アジア経済研究所。
- 島田周平 2007. 『現代アフリカ農村——変化を読む地域研究の試み』古今書院。
- 杉山祐子 2007. 「ミオンボ林ならどこへでも」という信念について——焼畑農耕民ベンバの移動性に関する考察. 河合香吏編著『生きる場の人類学——土地と自然の認識・実践・表象過程』239–269. 京都大学学術出版会。
- 野中健一 2014. 砂漠に住もう——カラハリ狩猟採集民の居住地選択と決定. 宮本真二・野中健一編著『自然と人間の環境史』99–116. 海青社。
- 原 将也 2016. ザンビア北西部における移入者のキャッサバ栽培と食料確保. アジア・アフリカ地域研究16: 73–86.
- 星 昭・林 幸史 1992. 『世界現代史13 アフリカ現代史I 総説・南部アフリカ』山川出版社。
- 松田素二 1996. 『都市を飼い慣らす——アフリカの都市人類学』河出書房新社。
- 三島楨子 2016. アフリカ系商人の富裕化への軌跡——ソニンケ人商人の移動と生活の営み. 栗田和明編著『流動する移民社会——環太平洋地域を巡る人びと』87–110. 昭和堂。
- 村尾るみこ 2014. アンゴラ定住難民の生存戦略は持続可能か. 内藤直樹・山北輝裕編著『社会的包摶／排除の人類学——開発・難民・福祉』122–140. 昭和堂。
- Brown, T. 2005. Contestation, confusion and corruption: Market-based land reform in Zambia. In *Competing jurisdictions: Settling land claims in Africa*, ed. S. Evers, M. Spierenburg and H. Wels, 79–102. Leiden: Brill.
- Bustin, E. 1975. *Lunda under Belgian rule: The politics of ethnicity*. Cambridge: Harvard University Press.
- Central Statistical Office 2012. *Zambia 2010 census of population and housing: Population summary report*. Lusaka: Central Statistical Office.
- Chiwona-Karltun, L., Nyirenda, D., Mwansa, C. N., Kongor, J. E., Brimer, L., Haggblade, S. and Afoakwa, E. O. 2015. Farmer preference, utilization, and biochemical composition of improved cassava (*Manihot esculenta* Crantz) varieties in southeastern Africa. *Economic Botany* 69: 42–56.
- Cliggett, L. 2003. Gift remitting and alliance building in Zambian modernity: Old answers to modern problems. *American Anthropologist, New Series* 105: 543–552.
- Crehan, K. 1997. *The fractured community: Landscapes of power and gender in rural Zambia*. Berkeley: University of California Press.
- Englund, H. 2002. The village in the city, the city in the village: Migrants in Lilongwe. *Journal of Southern African Studies* 28: 137–154.
- Ferguson, J. 1999. *Expectations of modernity: Myths and meanings of urban life on the Zambian Copperbelt*. Berkeley: University of California Press.
- Frayne, B. 2004. Migration and urban survival strategies in Windhoek, Namibia. *Geoforum* 35: 489–505.
- Gold, S. J. 2005. Migrant networks: A summary and critique of relational approaches to international migration. In *The Blackwell companion to social inequalities*, ed. M. Romero and E. Margoils, 257–285. Malden:

- Blackwell Publishing.
- Gugler, J. 2002. The son of the hawk does not remain abroad: The urban-rural connection in Africa. *African Studies Review* 45: 21–41.
- Heisler, H. 1974. *Urbanisation and the government of migration: The inter-relation of urban and rural life in Zambia*. London: C. Hurst and Company.
- International Labour Office (ILO) and Jobs and Skills Programme for Africa (JASPA) 1977. *Narrowing the gaps: Planning for basic needs and productive employment in Zambia*. Addis Ababa: International Labour Office.
- Jaeger, D. 1981. *Settlement patterns and rural development: A human geographical study of the Kaonde Kasempa District, Zambia*. Amsterdam: Royal Tropical Institute.
- Jones, W. O. 1959. *Manioc in Africa*. Stanford: Stanford University Press.
- Joseph, R. R. and Khan, S. 2015. Female trans-border migration: Case of Rwandan women migrants in Durban, South Africa. *The Oriental Anthropologist* 15: 315–330.
- Kashoki, M. E. 1978. The language situation in Zambia. In *Language in Zambia*, ed. S. Ohannessian and M. E. Kashoki, 9–46. London: International African Institute.
- Kashoki, M. E. and Mann, M. 1978. A general sketch of the Bantu languages of Zambia. In *Language in Zambia*, ed. S. Ohannessian and M. E. Kashoki, 47–100. London: International African Institute.
- McCulloch, M. 1951. *The Southern Lunda and related peoples*. London: International African Institute.
- Muanamoha, R. C., Maharaj, B. and Preston-Whyte, E. 2010. Social networks and undocumented Mozambican migration to South Africa. *Geoforum* 41: 885–896.
- Owour, S. O. 2007. Migrants, urban poverty and the changing nature of urban-rural linkages in Kenya. *Development Southern Africa* 24: 109–122.
- Potts, D. 1995. Shall we go home? Increasing urban poverty in African cities and migration processes. *The Geographical Journal* 161: 245–264.
- Potts, D. 2005. Counter-urbanisation on the Zambian Copperbelt? Interpretations and implications. *Urban Studies* 42: 583–609.
- Roberts, A. 1976. *A history of Zambia*. London: Heinemann Educational Books Ltd.
- Smit, W. 1998. The rural linkages of urban households in Durban, South Africa. *Environment and Urbanization* 10: 77–87.
- Trager, L. 1998. Home-town linkages and local development in south-western Nigeria: Whose agenda? what impact? *Africa* 68: 360–382.
- van der Geest, K. 2010. Local perceptions of migration from north-west Ghana. *Africa* 80: 595–619.
- Vansina, J. M. 1966. *Kingdoms of the savanna*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Vermeulen, S. and Cotula, L. 2010. Over the heads of local people: Consultation, consent, and recompense in large-scale land deals for biofuels projects in Africa. *The Journal of Peasant Studies* 37: 899–916.
- von Oppen, A. n.d. *Terms of trade and terms of trust: The history and contexts of pre-colonial market production around the upper Zambezi and Kasai*. Münster: LIT Verlag.
- Walker, C. 2010. Space, kinship networks and youth transition in provincial Russia: Negotiating urban-rural and inter-regional migration. *Europe-Asia Studies* 62: 647–669.
- White, C. M. N. 1949. The Balovale peoples and their historical background. *The Rhodes-Livingstone Journal, Human Problems in British Central Africa* 8: 26–41.

〈著者略歴〉

原 将也（はら まさや）

1989年神奈川県生まれ。現在、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程大学院生。専門は地域研究、環境地理学、文化地理学。ザンビアの多民族農村において、生業や環境利用、人びとの移住、地域史などに焦点をあて、農耕民の暮らしを調査している。主な論文「ザンビア北西部の多民族農村における移入者のキャッサバ栽培と食料確保」（アジア・アフリカ地域研究16: 73–86, 2016年）